

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

JAPAN

給妻雪古手屋

ヘ13  
2917



合 樓 雪 降 亭

卷之中

江戸

南仙笑楚満人校



後見送アモ母娘<sup>モチコ</sup>、ヨシテ<sup>ヨシテ</sup>柔<sup>ヨシ</sup>度<sup>ト</sup>よく翁顏<sup>カイガハ</sup>とつ<sup>ト</sup>キ<sup>ト</sup>母<sup>モチ</sup>我<sup>ガ</sup>の<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>、<sup>カ</sup>妻<sup>カミ</sup>よ<sup>カ</sup>退<sup>タマ</sup>つ<sup>タマ</sup>ふ<sup>フ</sup>行<sup>ム</sup>ま<sup>ム</sup>永<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup>笑<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>よりハちうど<sup>ハ</sup>卑<sup>モト</sup>の縁<sup>エダ</sup>切<sup>カツ</sup>て進<sup>アシ</sup>せ<sup>アシ</sup>や<sup>ハ</sup>八郎<sup>ハチロウ</sup>も<sup>モ</sup>ど<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ま<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>中<sup>カ</sup>、<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>で<sup>カ</sup>ちうど<sup>ハ</sup>卑<sup>モト</sup>、<sup>カ</sup>モ<sup>カ</sup>何<sup>モ</sup>も<sup>カ</sup>様<sup>カ</sup>子<sup>モト</sup>と<sup>カ</sup>ま<sup>ハ</sup>に<sup>カ</sup>權<sup>カ</sup>量<sup>カ</sup>あ<sup>ハ</sup>て<sup>カ</sup>わ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>娘<sup>モチコ</sup>と<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>五<sup>カ</sup>十<sup>カ</sup>兩<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>金<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>、<sup>カ</sup>ど<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ま<sup>ハ</sup>と<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>氣<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>

ちひながくひあるひはひじよだ。ハ郎もあきらめり  
まこととてひじよんともひ私あやふ平さんの方へ  
やどりこへ一きやくあてあるのか考がま可もぐて考  
てうえせたぐ病氣の生まとのひ私のがものにじ  
と。實の母とやバこそあゆより暴れて居ても與く  
手放さゆると考が考つてわやうと思ふをそよひす  
考不發でじきります。可おもゆて寄ますねと。まと  
持てあるかのま覺悟さうめてわらおにも子にむ

さく私ゆかはれが脊々腰きとく「アそやや氣  
きひきんの腎の生立とのひよみつて笑せんうほ  
かすりてゑよこの。私すらよこへあびて乳でも  
寝ぐと抱て寐よ。とひづかのくび身ふあまくて浮き  
時放まぬわのお見か、さあにあへてと藤ざくくふ  
せふまよひ。どうも身も代わゆまと。さくよう  
い妻ハタとあくべ「今月ハリのう總日にてあくね丈  
に別さもうた世の義理ふううまよて可をゆの子え

昭和九年六月六日  
附末

うよと見て、御身もうたその人ふ身と便せ候べり。身  
の被ひうわさす。やと口銃うづばつどさく見つ角  
はく母娘ハカとそてどもぐに。ラウムとすが、庄理  
あやへと直方ざうのて候てもみうすま。ぬしご思  
業もきあひよ。かくほけ後夜にも間ハ五キリ。りゆ  
ゆきねとりてハタケ山。おもみが頬もよみとてを草  
泣顔もせてハムキヨグカ。母と一ツにサアキヒと泣伏  
おまがまうて紀子ちやこの小思ひす。母の肉やのるん。

泣くふくべにう。お母おやもきのうきの事こといぢう  
御の書き連小八おとことも栓くわ小船ふね達たつくらぬ。母娘めいじょうもくや。無  
踏だの恩おんが女めの妻めぐらに通つひく。往むかふども。昨日きのひハタの  
おもおも。母おとこうつうきのとひの絶絶えも。惟ただあきあきて落おち水みず。もも  
ちうう。お母おやの八郎はちろうも。母おとこの名なも世よくへ立た  
優すぐ男おとこ達たつびゆく。お母おとこの女め中なか努つとむ。も母おとこ長なが懸けん。のうめ中なか  
さく贋あらわ名なもあれつま。ヤレやれ。妻めぐらの道みち理り  
ある雪ゆきがちう。いやけきのふつけても着き直ただ母おとこ。

さうの今いのをとまる。どうかとやふはうと下へひ四貫  
あふせせて、うづ林はやてもわせせ。いや四貫よとづづ、ひ四五  
貫よとづづもあらへままてもあまも待まて居ゐ。あらふ雪ゆき  
あやままたからぬぬち。がやや急そぐと里さとに通とおひかか  
門もんへすす。——「一日あまねぞ二秋きを思おもひとせう。ハアさ」  
せんせんの春はれもろハ菊きくせんせん寝ねがわすとととアアままよ先さ  
一一かくと火ひ舎しゃのそをそうと産うぶてままう。奥おく月つきままハ  
せど人ひと殺ころとぞ。「ハテハテかア星ほしが笑わらとんでせせああ素す。

さうの今いの解わか。そば居ゐる時ときかうももを  
轆じる小こ往むかりあませう。いややせああとを花はなが顔おも斗つもそ  
ゆゆへうと一一回まわの隣となり子ことをきああとと。お妻めハ怕ひてふ累たまご  
縫ぬいああ妻め八郎はちろうがんがんか花はなハよみがて脛あひとを  
らぬらぬややうんうんおおああせんせんくくよよううすすと  
ああいいでで晴はる涼すずてて。ちちと氣き分ぶつ付つづづよよ。私わままや  
ととよよけけととせせででよよたたののううめめやや。シテ  
母おままややハハじじくくああとと。おお花はなが蟲むしててああうう。ややくくほほう

まぐのあや。もう遠たりと無くゐ候の五十一  
金糸をぬらあ。うだりとすむ所めひに病  
氣ふらの延引。ちかにもひの藍方とせしる。  
どうゆうこゑをうへてあへ往け候。こま  
ち妻とちやいやつとねどもひます。酒さけ  
酒さけをうへてはまく持病の瘡きずともあやせぬ。  
と聞ひつからせてあまで海うみへそりあら。嫁よめさんのお  
あり。ひたひまなげ場ばのあだ。うけよどきみ五十三

折おりよくさむくおおこのハキシモ。城のつきざるふと。忍  
立たてだよか一金一きん。ひくえ槍やりひく。御おぎり。有あ婦め  
妻めを。お。妻めを。お。妻めを。一八郎いは郎わ。三房みふね。食  
ひくて。元もと角かくさきややて。ま。さすがかな。も智ち連  
二あう。あ。の金きんで。ま。ばせ。く。自じ生じゆに。ま。み。お。の上う卒そく。あ  
との金きん高たか。急いそに。ま。う。のま。へ。か。い。ど。ふ。う。ま。と。お。内うち  
銭せんの。あ。河か内うち。あ。川かわ底そこの金きん。お。も。と。う。ど。み。ま  
ま。づ。か。て。富とう。て。入い。で。ま。か。一。が。や。く。と。思おも。う。サ。道みち



おまへ金が不用と。妻めも大がい割さくとももとてす。是  
もえに、びくの延のびり度たどの僅すこ但ただふ月つき、切きり立たつてある。そひ  
伏ふれあくもさく。ゆゑの約束やくそくが、香奥こうおくの弥卒みそくさん  
の方ほうへ行ゆふかと恩おんひ切きつてひ放はなせ。夫おもやあひづか  
をまかの弥卒みそくが、妻めもよ。三さんテをや維まふわ轍わだて。アイおほかあひて、  
やうおきアイ、弥卒みそくさん。アイおほかがおひの轍わだよ  
お轍わだよ。よひも今まで物ものをさとひ、頃ほどま實じつをす。

のもうもおおきなあらわすのゆるの正やよそ等  
うとあやかすがふくふあがりますもそよやめま  
すをさきへゆゆ中あゆのてんぶつはずとよみこづ  
側へちよどくとひげく擦とひく味せん  
うてくあまえ  
「却あああびてまほひそめかのゆり  
でうちあひてそこのまとづねえとくにふは  
「ま。ああそやあああ」の端寿何が西引てと味せんひく  
かあひ  
アイと尋ねひく尋ねの尋ねをあまえの

官ともせども早く金が懸中（けんちゆう）。せんとせうがま（えうがま）  
底（そこ）八節（やせつ）「ゲンへりのよかよだれど。み年はまかき  
女ともあらず。裏毛よままでづは。すみ身の放縦（ほうじゆう）もいと  
見ばこそ不孝（ふこう）のと爲名（なまめい）。とく人の異見（いじみ）もるを耳（み）。と  
見よあのせうにおひんで。今小寒（こひん）をまつらひあへて。  
とまがふさへて人の酒（さけ）も。今月このひとよらひあへて。  
あうへたうごうのうがふさぎてて。なりふか（うらう）あらまこと。  
ゆへて残念（ざんねん）とてのうきまうとあらず。金汎工

梨小若（りこわく）して居（ゐ）てあらと。勿体（むぢ）無（む）。想定（おもてい）の目が  
半（はん）す。金（かな）こへらすと取（う）りのもあ。と。宿（しゆく）公（こう）荒（あら）で。來（き）て  
又（また）今宵（こよひ）のあざう。ああは被（まつ）へ急（きゅう）なりよ。かげて店（みせ）の  
退（だつ）けと。何んの暮（ぐれ）すのを妻（め）さうむとりふも思（おも）切（きり）と。  
是早（はや）ふやう門（もん）の向（むか）奥（おく）より母（おやし）のあと（あと）て。退（だつ）け。何んの  
八郎（はちろう）三房（さんぼう）の人の子（こ）と。ハあづくと。あはすと連（つら）そよ  
とよと。が強（つよ）くも。孫（まご）のあ亮（りょう）。全（ぜん）くまと抱（いだ）く。門（もん）へ  
寢（ね）かへり。戸（と）と立（たつ）き。お妻（め）ハ。お夜（よ）と。おうと。ときへさせど

月娘もあまくわともひきだ寝て。かたは嫁と月娘。  
娘花  
「かさまのひととあつて初子。ござんあざと  
あさるとき。よみ字がゑひを」とさうせども「已  
らうべくちませぬがどふ。がく氣ふ。洗言とやさあまのせ。  
かゑにあせと下さる  
節度  
「マよひや」とさうせと  
ちどり。ちきりとどもよしわぬまゆ。あの妻ハコブ  
おう母がやうむすめ。子ハ景不どんうみのんでうの  
ちうく。主  
高主あはれひとくが可もぐそ抱て延てやぬねも

ねや。ごらんを。子ハ豈やどふ墓のへでさ  
のアノも妻。アリヤヨラジホミが母ちあきとぞよ  
あやそ五。でも達ニヒトのア。アノ家理あらざりのア  
アノ家理あらざりのア。よくゆの。今のはまともあらざりの  
まともあらざり。将もとあらざり。アラシ  
ゆくえぞ是あ。折子のあらざり。アラシ  
ども。最毒のあらざり。アラシ。も一參合鳥がひあり  
一參合鳥がひ。アラシ。いやく  
一參合鳥がひ。アラシ。

未練らうう男の女にもかとお妻まことが女めのこも残念ざんねんを。  
人ひとへふるひよの練言ねりごんがむとおりつぶやれぬゆゑにすまひ  
猪いのの周まわりうなはけくらむかわが窟くわ穢けい  
ぬぬええすすもあくあくもすくすく往むかして林はやに入いる酒さけもあらうまま  
ううれれはあきらあきららまぞまぞひくら苦勞くらうととさせせしまます。情じやうめのううが  
ひひくひひく思おもひゆゆどもどもさまさまがひくひく思おもひゆゆのききづ  
ままいいひひ男おとこも子この女めのこも牛うしも一ひとももばれ道みちもああと  
はく雲くもの歌うたのさむさくさむさくうとうとと子この男おとこにああいくと

あくまでも此の縁の切口にあたってはうごくべ。妻も  
男の妻として「三國一義や輩ふきよとまへ。」シヤンく  
の妻と毛相手おもふをせうふううーとそなう酒機  
げ。さううううう妻のねむつりーあるひ止解と  
頬と笑みのくほよつておあが思ひはうとうう  
裾ふくらみ 弥コリヤ侍とお妻も取へんぞこくわくへん  
おれとゆとあひてりやつぶとまよであらうかーふ  
八郎三<sup>トモ</sup>行ああやのぬいぞよくまで

あむや金こうひの薦すもゆきゆうど。ゑひへをまは  
八郎まくげまく思ひきてる。妻えのひひ切つのまくぬ  
のと。そやうと音のこと。よしや今ぞま寛め  
ひときだ  
一筋ふあひてわらひの「ソリヤ誰を」ハテ外でま  
ウアノあまくと一いやちやや宣言じやく妻え  
今えうそ偽うといひます。今そ極草が毒とく  
鬼子母神さんか祖附見え神こうきての大誓文「ま  
だまううううううけのそとやどまざと因みて是とが  
室をううううううけのそとやどまざと因みて是とが

かす。男ぢや。あはれむ中。まことに妻めぐら。たゞに  
そよよ。まみぢや。今こそ室むろ。まづのまへを全まつ  
まく。も前まへのふくわざく。ほのあつた手てとぞと  
思おもへば。のぞ今きく。悲かなしき。かく  
見みゆかと。ひすうれはる。まくまく。と腰こしを袖そで  
風かぜ。はづかる。翠みどり參さんも。うごと。浮木うきへどそら。すま  
のゆみり。けり。塔とうふき。香こう奥おく盆ぼん。解わから  
のいきく。身みあつて。名紋なふみと。車くるま。妻めぐらが脊せきと

タガチア、スコニ、おまがおやうむこちの女房だ。その  
まふはてくありもは珍平があまうにうけどんちふ。今  
くらかねとを女房に持バカラハキムモツギマキ。  
力体きわあくのあくのと。ごまへのこゑれ寢戸。よ  
あき。まづ八郎とは称すと。男うづくちと  
考。またもアホ一に食がどもあ。郷弁でも衣被で  
も好みを。三度の素も鰻の蒲焼がよいとゆ  
ううだ。魚が抱てゆふ。頃ハリふあまうと持ぞ。而



の。春波はあさうす。毎日ひそかに。好みのくじわん  
をあらう。喜びが日々多くある。あはれ山やうめん。  
そとづくもゆぬやどふ。仰うたとまよみくよひ。草  
さんふ絆ざくと。いそやうやうのやうに可。墨うぎを  
あう。こしあはぢ。おなじゆくねがひよせた。せんそ  
ゆうて。まつて。居ゆうこと。えもう。はるはる。徳  
えんべく。天廟の十丈へ。やう醉まげ。一アくさき。萬才づる  
りうかと。まつめ。うまく。女ふへかけ。掠のきよざま

ひきやうわぢゆるふきそ。ひとゆうだれゆくま  
ひくふとアノハキシヘやふ見ゆくきくまへて業がくや  
あて浦ゆづぎをあくよアムモニマハく、イヨゾク  
あらかとぞみゆく  
ちの間太の紳士まよせ  
小もぬがごくこまく  
まもじやう  
まもじやう女郎もまほまふをあきがこそ星をで  
タジンと八郎と対坐すと対坐すとまくとひよろ勇に象く  
て今まニ世も三世もその代も幕ゆくふ清ゆく

女史中。さへづるひ十日ハ媒のぞく侍女郎二段三復  
の早う。ち自ら發酒の香あたとせゆをうつめ。イヤ  
そよべさうと折まゆがまにて玉を立す。とし。  
今更とも實にほ子の妻の達方をも。うお後まうご。  
えハ物のうち今朝も申ふ。お前の東北河内の  
ああまでうしよ立。物と首尾よのうて。と。ごりま  
せんう。イヤあう。何う。何まぞ。行届く。延年がみ。大  
猪の神の十日ど。祀へ。役小く。あて。あて。あて。

あまを。可あ。女房うちも。で。連て。御主。まかを  
のべにも。抜が。あけ。と。互べ。あ。あ。も。の。の。の。の。の。の。の。  
かま。か。妻。と。肩。ぶ。て。行。ハテ。そこ。木。枝。因。の。の。天  
角。の。十。日。者。か。が。人。雇。ふ。て。あ。ま。く。ニ。ヤ。も。余  
を。ぐ。あ。れ。通。年。の。あ。ま。た。医。者。と。い。だ。寺。ま。で。や。る  
ま。ま。く。シ。テ。キ。驚。ど。ふ。唐。ツイ。モ。く。の。せ。に  
待。せ。そ。あ。い。こ。や。も。今。一。支。峰。で。ま。年。母。弘。あ。く。う  
あ。山。一。か。あ。う。加。を。連。え。り。て。入。國。が。あ。且。バ。一。旦。是。

行幸す。八朝處の辻坂の裏面で、やうてある。案  
と連れて十数人を従ひ、坐て置く。あらうと、教へて  
ぞよとのすもあくせん。其門に手を出して立候。一いや  
お妻のうのを、よりへて、まく吹ふ。お袋と仰も、案あらう。  
おれ一切不自由のさんすにて、あこを妻細のうち  
すまへた。教へて、いそげ、近ふと連れて、ひそく人の目に  
さうと面倒。さうだ。東方無小待て。あらがふ。本さうも  
卑くかまや。何もかたへだゆ。東方タレ姫。——おまごが

さがりうのうきうどひふく。おまもこふ。あたぐうまひの  
ゆちふくのむ。おまえやうと。妻がつづくえど。せんくまとて、おたに  
開ぐくううて。あこ。壁うちあひ。公連て。のあうと。娘観  
とてお娘の経言う。娘お中へ。おうめのうあへ。天下  
時とて。お娘のう。やどりく。子が生とる。二正宮あひとく  
抱よて。お娘のう。やどりく。子が生とる。二正宮あひとく  
誕生。三才の経ひ。お娘の娘。お娘。お母。お母。お母。お母。  
コリヤ。駆けのね。やどりく。おあがまに。見うとく。さふ。

うつへゆくも内澄の猶のえんはむとづみた  
さう立て天甫十丈。まがや一あくが高車さんも  
女房のうへ男ど。ヨレを妻さんひえんはあのとがアの  
けつざうへあらもいやうふとちうと事跡して。づくく  
てあやさまよひを食むた。うち。ハテキ肉火がまでも  
きらう。ドレ一まや。鶴等んで。とまくと侍う往て母々  
乗下りまづび出。そきこのか。何もうふが母が持童く  
てあう程ふるみを頬みて。そのまや。ハテ御佛ハ

見通す。まくのゆふき。猶もううりと。えんとさくら  
八角えきえがやと。まこ。まのめで。まのめ。今まく食  
きや。まく。まく。まく。まく。まく。世のまくの  
壁。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
魔單の夜ア。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

まく

まく

まく

まく

まく

まく

まく

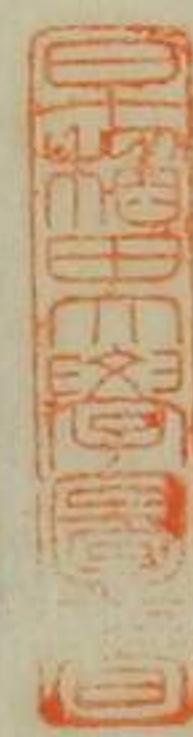
まく

居うけ事。か年よきと母さまといひもく現世もつら  
あのが死がる。まこと娘であやらうと思ひもつて  
せうう、往生てもゑどあくとぬは身。どうぞハ命  
きのまにそう。とひと妻嫁門の外ハ第三へ娘がむと  
あぐづのあふ頃けを人目とあぐ頃翁は世をも  
さあざやの一腰。おもえさと尾。おもれ。身軽く坐立軽の  
は。よりやとやど嚴。まことせんおの冥否。ぶふと死。死と墨  
捨。かき男のの死。死門の内細身ふゆく様。おもてもぞ窓。まど

まふへあうこの方よし足音多く。おもかく駕。か車。くるまく  
於。おもすすこ十あまり。おもせを走。はしるく。まち八軒屋。やとみ小田  
家提灯。たんぽ駕。かをほこせて入。いまう。指手。さし手。てと見。みる。云  
八郎。はちろうえ。わもあり。序。じわくとうきづて。おのあきひた  
身。みと脅。きかくともあくび門の外。ほか外。ほかをき内。うちふの里  
サク。さく駕。かに蒲團。ふとんもあひて坐。す。お妻。めがうゑく坐。す  
く。くそえきりよ行。ゆきりやくねうる。ゆきりやくね  
おうモウせ偽草木。うそ木。きでまく。秋。あき時。とき。孤平。こひらさすす疊床。かね

コレお袋さんをあつてまで皆美知は十日湯が春江で  
わ。河内へつととみ波と仕事もかうほど出来どまへあす  
き。今まで母も笑顔と泣く。いやも何ううふまで  
直源切るまも泊りへともふようと年うと夕涼み  
千ち代 構模振を妻へきてせたあ事。そんなん母  
さんほのう。母 エビシナシウチとぬハいひきこと。不  
りまのじ湯のよしむせび入をと理タリ。サクツイタキ  
のふとも名残へつたね。やくノととと取てお妻とがる翁不

家と正六月ハ空蝉のりぬけの駕。いち早とぞまやく  
がもつうむ八郎。あらきませて因やの燈打切とまの周  
かのゆのゆへにぐふやれんごうとうちくえ牛ア逃れ者  
只因もみぎ。不舎ゆの想ひ志とがのくくなう  
ううの双。もごくえのけよ。不審教。まやや免送  
とあくとア正六月南十番是縫。かうくらんで  
何すりどあもとあて伏が三助にて呉のあま夜  
も。お平方入逃きどと退行ぬ音。ゆくと。川の戸明う



母ちのありとべぐに遡入さかへる十ニ席。逃さのぞさのぞうと  
八郎三郎母ともあくぞ切父自及晴の従そなわやねよの頬老お  
かかんから更またする

合棲雪降亭あわせくらきゆきふり巻之二

